

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大鹿 眞央
論文題目	中世日本密教の形成と展開
審査要旨	
<p>日本の密教は、空海が完成度の高い東密の基盤を構築した後、新しい密教を導入した台密が勢力を持つようになる。そして、その台密を研究することで、やがては密教の主流が東密に移っていくが、それまでは互いに拮抗して展開していた。本論文は、所謂、東密教学が形成されるまでの過渡期とも言うべき中世の東密の教理を中心にして、幾つかの問題を掲げ、その展開を扱うものである。中世の密教についての研究は近年成果が挙げられているが、当該の領域は極めて広汎であり、扱いうる分野は限られてくる。本論文の中心的課題は、初地即極という東密独自の教義に注目し、その展開と、それに関わる思想を探るものである。内容は、序章と九章から成り、その九章は以下の目次の通り、三部に大別されている。(章中の各節については省略する。)</p> <p>序章</p> <p>第一部 覚鑿の教学における諸様相</p> <p>第一章 覚鑿の妄執論、第二章 覚鑿の行位論、第三章 覚鑿の三劫段解釈 第四章 覚鑿の教判論</p> <p>第二部 初地即極説をめぐって</p> <p>第五章 初地即極説の形成、第六章 東密における三劫段解釈の展開</p> <p>第七章 東密における宿善解釈の展開</p> <p>第三部 日本密教における『瑜祇経』解釈の展開</p> <p>第八章 東密における実運撰『瑜祇経秘決』の受容と展開</p> <p>第九章 東台両密における『瑜祇経』解釈の交渉</p> <p>第一部の四章は、それぞれ覚鑿という人名が記されているように、新義真言宗の祖である覚鑿の思想を扱うものである。空海や覚鑿には初地即極を直ちに説示する記述はないが、初地即極説は真言宗の即身成仏論とも大きな関わりを有するため、基本的な見解を確認しておく必要がある。従って、覚鑿の教理を通じて、『大日経』や『大日経疏』といった根本経論の原意を探っている。それが妄執論や行位論である。そして三劫段については、次の教判論同様、教判に関心を寄せて論述している。台密から空海の十住心教判に批判がなされたことに対して、東密から実範や信証によって再批判がなされたことは著名であるが、覚鑿の思想からそれを探った点が着眼と言える。</p> <p>第二部の三章は、本論文の肝要と言うべき論考である。初地即極という観点とは、東密の教理としては基本説であり、発心即到と相俟っての研究も既にあるが、細かい点が整然としていなかった。すなわち、その初出と考えられる『顕密差別問答』の詳しい考察や、諸学匠による受容や展開等、細かい検討を行った。人物としては、昨今の学会で研究者に注目されている道範と、その師である静遍の教義を解明するところに力が注がれている。また、真言の初地について、余教がその位に接合する教理を、如何に整合させるか、初地即極を主張する立場と、そうでない立場での違いを論じている。次に、宿善についての論考を収めている。その有無は東密における「宿善有無」という論題で示されるとおり重要な課題であるが、その前の段階として、道範が宿善の必要性を力説していることから検討の必要性が生じたものと言える。その特色を、今生・現生における宿善を認めるところに見出している。そして、やはり、この道範の教説も師である静遍の継承・展開であることを論じている。</p> <p>第三部の二章は『瑜祇経』を題目に入れる論考であるが、実はこれも初地即極説のとの関わりから問題点を探っている。ここでは、第二地以上を化他の位とする初地即極説の源流を、実運に求めている。そして、第二地や第二地以降の行位についての、後に展開する教義を検討し、それがそのまま踏襲されるわけではなく変</p>	

氏名 大鹿 眞央

容していく過程を論じている。そして、最後に東台両密の交渉を『瑜祇経』の解釈に依って論じている。それは交渉と言うより、台密の安然が著した『瑜祇経疏』が与えた影響と新たな展開を、特に「障」の解釈から論じたものであり、今後の研究に繋げる論考になっている。

以上のように、本論文は最初に東密の大きな転換点となった覚鑿の思想を分析し、それを中世の真言宗の行位論研究へと繋げている。特に、それまでの伝統とは異なった初地即極説の台頭と流布については、従来踏み込んだ研究はあまりなく、それを解明したところが本論文の業績である。更に、それは『瑜祇経』の研究へと有機的に展開し、今後本論文を大きくまとめていくことが期待される。

そこで、本論文に対する所見と、今後の展望について付言しておく。

先ず、題目に「中世」の語を掲げ、その定義については、新進の歴史学説に依拠しているが、その立場を密教の教学史に該当させることの有効性にはやや疑問があり、もう少し詳しい説明が必要であろう。

また、初地即極については、中国華嚴宗で主張された信満成仏との類似が既に指摘されているのであるから、そのことへの言及が必要である。しかも、その信満成仏は日本天台では初期から注目され、殊に安然が密教に導入したことは重要である。密教研究は、ともすると、仏教学一般における議論が希薄になる傾向がある。単に、中世東密の枠で捉えるのではなく、広い視座が必要であろう。そのことは、密教とは何かという問題にもなる。

本論文の題目に関わる領域は、今後様々な観点からの研究が期待される。そのような中、東密の根幹とも言うべき教判論と関連付けて、独特の展開を遂げた初地即極説を多角的に検討したことは、今後の教理研究に裨益するところも多く、博士(文学)の学位を授与するのにふさわしい業績と言える。

公開審査会開催日	2019年 5月 17日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保 良峻	仏教学(日本・中国)	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山部 能宜	インド哲学・仏教学	博士(イエール大学)
審査委員	弘前大学人文社会科学部・准教授	原 克昭	日本思想史(中世宗教・文芸思想)	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				